

市民の方からの通報

市民の方から京都新聞社の記者に「ミツバチが雨ざらしの場所で営巣している。珍しい現象だ。外来種のミツバチの種類ではないか。」との通報がありました。その成り行きは、平成20年6月19日の京都新聞朝刊に紹介されています。その記者から衛生動物部門に取材がありました。電話での応対を済まし、私たちも情報収集のために現場に駆けつけることにしました。楠の大木にミツバチの営巣が確認されました。



外来種？

世界のミツバチの種類は、4種類です。

ニホンミツバチ（トウヨウミツバチともいう。）は、日本、東南アジア、中国、インドなどに分布する種類です。私たちの周りで最も多く見られる種類です。京都市が委託しているミツバチ駆除のほとんどがニホンミツバチです。

セイヨウミツバチは、もともとヨーロッパやアフリカに分布する種類です。昔から家畜化され、日本には明治の初期のころに輸入され、蜂蜜採取に重要な役割を果たしています。今は、全世界的に養蜂が行われています。

ヒメミツバチは、インド、東南アジアに分布します。名前のおと小形種です。性格もおとなしいといわれています。

オオミツバチは、ヒメミツバチとほぼ同じ地域に分布します。名前のおと大型種で、ジャングルの高い樹上に営巣するといわれています。今回の新聞の記事になったミツバチも樹上で営巣していたため、市民の方は、オオミツバチではないかと思われたのかもしれませんが。ハチに詳しい方でした。

種類の確認

ニホンミツバチかどうかの確認のためには、働き蜂を採取する必要がありました。巣までの高さは、およそ6メートルです。捕虫網では、到底届きません。思案をしていると、市民の方が私の持っていた捕虫網を取り上げ、樹に上り始めました。危険ですからと制止しましたが、するすると樹をよじ登り、働きバチを採集されました。大きさから見てオオミツバチでないことは明らかでした。市民の方も見るなり「外来種ではないな。ニホンミツバチや。」と残念そうでした。

開放空間のミツバチの営巣

ニホンミツバチが開放空間に巣を作るのは、いくつかのデメリットがあります。一つは、雨ざらしになることです。ミツバチの巣は、幼虫を育てる場所です。また、花粉や蜂蜜を蓄える貯蔵庫でもあります。大量の降雨があれば、貯蔵庫に蓄えている蜂蜜への影響は無視できないと思われます。今回の営巣は、大木の楠の枝がうっそうとしていて、直接、降雨にさらされないことから営巣が可能であったのかもしれません。

もう一つの問題があります。ミツバチにとって、最も厳しい季節は、冬です。食料源としての花蜜が少なくなる季節です。貯蔵庫の蜂蜜は、幼虫を育てるだけのものではなく、巣を維持するための働き蜂の餌でもあります。冬の寒さに耐えるために、働き蜂は、蜂蜜を食べ、それをエネルギーとして体温を上昇させ、巣内の温度を保ちます。ところが今回のような開放空間での巣は、寒さに対して無防備で、より多くの蜂蜜が必要になると思われます。冬越しがこのミツバチにとって大きな試練です。ただ、通報された市民の方が、「11月になったら、この巣を採取して蜂蜜を取るのだ。」と言っておられました。とても、冬まで持ちこたえられないでしょう。

母屋

さらに、市民の方が数十メートル離れた次の巣を案内してくれました。柳の木に空洞があります。頻繁にミツバチが出入りしています。おそらく、雨ざらしの場所で営巣していたミツバチの母屋でしょう。これだけ接近して二つの巣があると花蜜の取り合いになりそうです。

